

北海道開拓記念館寸描

山田家正

1. はじめに

最初に、この伝統ある「人文研究」の第105輯を私名の記念号として発刊して下さり、拙稿掲載の機会も与えて頂いたことに厚く御礼申し上げます。そして併せて小樽商科大学在職中の23年間にお世話になった多くの教職員と卒業生の皆様に改めて厚く御礼を申し上げたい。さらに、法人化対応をはじめ大学改革の渦中であって秋山義昭学長はじめ教職員各位の多大なご労苦をお察ししている。しかし、多くの困難を乗り越えて小樽商科大学が文字通り北の一星としての輝きを増すであろうことを確信している。

本稿の内容を考えるに際して、編集委員の先生から制約はないとのご連絡を頂いたものの、研究の第一線から遠ざかっている者として研究発表の紙面に相応しい内容は書けないため、現在の仕事とそれに関連した私見を綴ることをお許し頂きたい。

2. 現在の仕事

2002年3月末で長年過ごした小樽商科大学を離れて、6月から野幌の森林公園の一隅に佇む北海道開拓記念館（以下、記念館）の館長として勤務しすでに半年が過ぎ、時の流れの速さを実感している。秋には小樽商科大学の高橋国際交流センター長、担当職員ならびに短期留学の留学生が多数来館して下さったり、交流協定大学のエクス・マルセイユ大学のブルドン学長ご一行が小樽商科大学訪問の帰途にお寄り頂き再会できたことは光栄なことであった。また、博物館は学芸員志望の大学生が実習に訪れるところである。道内

外から年間 60 名（一期 20 名程度で年 3 回）ほどの学生を預かる。そのために大学との連携が欠かせない。研究上のことで大学の研究者達の来館も多い。このように、記念館も大学とは色々なことで接触が多い職場であることを改めて知らされた。

博物館については、高校生の頃から上野の国立科学博物館に時折訪れていたこと、私自身の海藻学研究においても長い年月をかけて収集された膨大な標本・資料は身近なものであったこと、2000 年秋から国立科学博物館の外部評価委員を務め博物館の実情をある程度理解したこと、などから親しみと興味を持っていたので違和感もなく楽しんで仕事をさせて頂いている。さらに、私が昔学び、勤めた北海道大学理学部の建物が現在北海道大学博物館に衣更えしており、楡の木の多いローンに面した南側 1 階のかつての研究室が展示室になっていることも何かの縁かもしれない。目下、博物館学のほか考古学、民族学、アイヌ文化などについて本を読んだり直接学芸員から教えてもらったりしているが、今までと違った分野の知識を得ることに新鮮な喜びを感じている。トンネルから抜け出て突如異なった視界が広がったような不思議な感覚である。

とはいえ、館長としての仕事は館の運営、経営が第一であるから興味本位で過ごしているわけにもいかない。道税で運営されるために、国立大学と同様に厳しい財政上の制約をうけ効率化を図らなければならない立場におかれている。当然のことながら法人化という歴史的な大改革に直面している小樽商科大学をはじめ国立大学の過去、現在、未来と重ね合わせて考えることが多い。

また、4 月から与えられたもう一つの仕事、小樽市の顧問として財政再建の方策あるいは市町村合併の問題など難問を抱える市の再生のシナリオを描く作業は私の能力からすればかなりの重荷である。目下、意欲のある若手の市職員 10 名と勉強中であるが、まだ先が見える状況にはない。いずれ特定分野については小樽商科大学の諸先生のお力を借りなければならない場面があるので、その時には是非ご教示を頂きたいと思っている。

この他、従来からの小樽の「能に親しむ会」と「海洋開発推進協議会」の会長とか、新たに委嘱された「道立アイヌ民族文化研究センター」の運営協議会委員長などの務めや時には講演、原稿依頼もあって仕事の中身は極めて多様である。今までも「何事も天命」と言いつつ過ごしてきたので多忙であることに不満はないが、仕事の内容が学長時代よりも多様化し細切れとなりスケジュール管理が煩わしくなった。このように、大学退職後は世間の喧噪から一步距離をおいて過ごすことを夢見ていたこともすでに過去のものとなり、相変わらず組織改革とか効率化を考えなければならない環境の中で日々を過ごしている。なお、上記アイヌ民族文化研究センターの運営協議会では、かつて小樽商科大学におられた津曲敏郎先生（現在北海道大学大学院教授）が委員としてご一緒なので大変心強い。さらに学長時代に幾つかの審議会とか委員会を通じてお付き合いのあった道の職員の方々には今も何かとお世話になっており、その点も有難いことである。

3. 記念館の概要

記念館に勤務するようになって、近くにある開拓の村に比べて当館の知名度が少し低いことに気づいた。私は、博物館等の文化施設はその充実度が地域文化のバロメーターとなると思っているので、機会のあるたびに紹介宣伝し、意見を頂くようにしている。時には手厳しい批判を頂くこともある。

記念館は総合歴史博物館の性格を有し、英文名は、Historical Museum of Hokkaido である。北海道開拓百年を記念して1971年に開設され、今年が32年目になる。近くには同時期につくられた百年記念塔と前述の開拓の村がある。職員57名のうち、学芸員は27名、事務職員13名（うち館長を含め非常勤4名）、解説員（全員非常勤）17名である。館長は非常勤特別職で、原則として週2日出勤（現在は火、金）とされているが、土、日曜日が開館、月休館であるために諸行事が土、日に行われることが多く、また国内外から特別な来館者がある時の対応などで、原則は守られないことが多々ある。北海道

博物館協会会長や日本博物館協会の理事も兼務しているので記念館以外の仕事もあるし出張もある。

奇妙なことに、この非常勤館長という辞令には任期が記されていないかった。適当に自分で判断しろということか、あるいは時がくれば交代を示唆されるかのどちらかであろうが、県立の博物館などでも同様のケースが多く、非常勤の館長というのは元来名誉職的な位置づけになっているようである。そのために、行政出身の副館長が通常の管理的業務を掌握してくれる仕組みになっている。このようなことで、私がいつまで館長を続けるのかまだ私自身わからないが、老害と言われぬように早めに出処進退を明らかにしておきたいと思っているところである。ちなみに、当館の初代館長は犬飼哲夫・北大名誉教授（動物学，就任期間8年），2代目が高倉新一郎・元北海学園大学長，北大名誉教授（5年），3代目が渡邊佐武郎・元札幌医科大学長（9年），4代目が城戸崎彰氏（行政出身，3年），5代目が吉田和夫氏（行政出身，5年），6代目が私である。平均すると館長在任期間は5，6年であろうか。

記念館は職員構成からみても学芸員（研究者）が多く，その規模は地方自治体が持つ博物館の中でも千葉県立中央博物館（研究者70名）や滋賀県立琵琶湖博物館（29名）に次いで3本の指に入るものであり，内容からみても国立以外ではトップレベルの博物館と言っても過言ではない。このことは博物館関係者ではよく知られているようであるが，一般道民はあまりご存知ではないと思われる。社会的ステイタスの高い海外の博物館と違って日本では博物館の存在自体が地味なのであろう。PRの不足もあると思われる。創設当初の学芸員数は30名であったが2年前に定員削減により27名になり，祝日勤務の問題もあって，学芸員の仕事量はかなり過酷な状況になってきている。学芸員の仕事の第一は調査研究であり，海外の3博物館（中国黒竜江省，サハリン博物館，カナダ・アルバータ州博物館）との研究者交流もあって活発に動いている。研究分野は歴史学，考古学，人類学，民族学，産業・生活，地図・地理学，美術，生物学（化石等を含む），建築学等々で広範囲であり，

学位取得者もいて研究レベルは高い。学芸員の他の重要な仕事は、調査研究の成果を生かしての展示(常設展, 特別展, テーマ展), 講演会, 見学会開催をはじめとする教育普及活動である。

ここで、記念館の科学研究費獲得の状況に触れておきたい。道の研究施設としては例外的に国の科学研究費を申請することが認められており継続を含めて毎年約 10 件が採択され貴重な外部資金獲得の源泉となっている。

大学の研究者はあまりご存知ではないかもしれないが、文部科学省の科学研究費の規程(科学研究費補助金取扱規程第 2 条第 4 号)には申請可能な研究機関の一覧表があって、この中に盛り込まれていないと申請する権利がない。有難いことに当記念館がそのリストに入っているということは、当初から自前の研究費が乏しかったことから、先見の明のあった先人達が科研費獲得のための努力を惜しまなかった遺産なのである。国立以外の地方博物館等で科研費を申請できる場所は十指に満たない程度であるが、その理由として、今までは比較的潤沢な研究費が与えられてきたことが挙げられようが、もう一つの理由は、この権利を獲得するための努力と研究実績が不足していたのであろう。現在のような財政難の時代になると、科研費の存在の大きさに気づくが、時すでに遅しという研究機関が沢山あると思われる。さきに当記念館は道の研究施設としては例外的に科研費を申請することができると思ったが、今後は道全体でその認定枠を拡大する努力をする必要がある。

小樽商科大学での経験も含めて敢えて言えば、大学の教員の中には初めから申請する権利が与えられているためか、その権利の有難味を知らず、申請すらしない人がいる。これでは研究費は不足していないと思われても致し方ない。大学人には、科研費の申請すら出来ない研究機関が多数存在しているという現状を是非知っておいて頂き、自分の立場が如何に恵まれているかを再認識して欲しいのである。

4. 記念館の課題

前にも述べたことであるが、知名度を上げることは課題の一つである。お客がこなければ存在意義が無くなる。道民が、北海道には素晴らしい記念館がある、と胸を張ってPRして下さるような身近な存在でなければならない。自己満足だけでは遠からず消えてしまう。そのためにどうしたらよいか、目下思い悩んでいるところである。課題の第二は、“開拓記念館”という名称についてである。これはすでに内部で検討課題になっているものであるが、何時までも開拓という言葉を使い続けるのか、もう時代遅れではないかという意識と、先住民族から見た場合は開拓ではなく破壊と侵略の歴史であるという視点を重視すべきだという意見に基づく。鉄製の百年記念塔は、先住民族からすれば自然破壊のシンボルであるという話を聞いたことがあり、念頭から離れない。

課題の第三は、広い意味での行政改革に関する諸問題である。最近、博物館等においても評価のあり方、法人化、再編統合など国立大学と同様な問題が突きつけられるようになってきた。当然、記念館の運営にあたっては、道立の機関であるために、国立研究機関や国立大学の法人化等の変革の流れと基本的には同一の軌道にあることも常に意識せざるを得ない。法人化を目前にした国立大学の緊張した状況とその対応策、大学運営協議会など外部の意見を採り入れるなどの運営の透明性確保、外部評価への対応、再編統合問題等々は、公立の施設が国立の機関より一歩遅れて直面するであろう諸課題と認識せざるを得ないからでもある。2002年11月に訪問した大阪市立自然史博物館、滋賀県立琵琶湖博物館、国立民族学博物館（民博）では法人化必至との判断から独自の対応策を検討中であった。特に民博は国立であるために他の国立人文系5機関と一括りで平成16年度から法人化されることになっており、その制度設計で苦勞しているとの話を館長から伺った。丁度、道内国立6単科大学の統合問題と重なる状況である。

大学も博物館も、法人化への移行過程では大変な苦勞が予想される。法人化を契機に、国の税金で賄う大学が国民の期待に応えられる改革が出来るか否かは今まで以上に厳しく問われるであろうが、その問われ方、評価の仕組みを大学自体がどの程度建設的に提案できるかが大きな課題であろう。評価の仕組みも進化するものでなければならないが、それには現場からの意見を採り入れ関係者が自ら作り上げると意識が不可欠であろう。そのような課題に、これからの国立大学協会はどのように対処するのであろうか。現在、新たな国大協の組織づくりが検討されていると聞いているが、法人化に伴って各大学とも自己中心的な生き方を強め、我が国の高等教育全体の方向性について議論する場を保持できるかどうか不安である。また、従来から、文部科学省は、とすれば理工系の大規模大学を中心に高等教育機関の整備を進めてきたきらいがあるが、法人化後に単純な競争原理重視の力がさらに加わることにより、大規模大学が益々大規模化し、小規模大学が衰退する方向に動く可能性がある。新たな国大協には、そのような偏った流れを是正させ、多様な環境に置かれている多様な性格の大学がそれぞれの個性を発揮できるように力を注いで頂きたいと思っている。もとより、各大学とも自己責任が増大するために、構成員の意識改革が生き残りの鍵になることは間違いなく、新たな国大協に過度の期待を抱いてはならないであろう。それよりも北海道の7国立大学が如何に協力連携するかが大きな鍵になると考えられる。これについては現在協議中の課題であると理解しているので、今後の具体策がどのように進展するか大きな関心をもって見守りたい。国立大学の改革の姿が博物館の将来にも大きな影響を与えると思われるからである。

道の問題に立ち戻る。道では研究機関等への政策評価、研究評価等を2002年度から実施することになった。2003年1月には評価委員（外部）からのヒアリングがあり、館長が説明し、質疑に応答しなければならない。当面、人員削減、記念館展示業務の一部外部委託の検討、効率化を果たすための工夫、などが焦点になると思われる。道の機構のうち、すでに札幌医科大学は法人

に移行することを検討していると聞いているので、記念館などの研究機関も法人化を検討せよという指示がくる可能性もあろう。

私は北海道博物館協会の会長として、市町村立の大小様々な道内博物館等施設の今後のあり方を考えなければならない立場にあり、国立大学法人化の今後の推移を注意深く見守り、大いに参考にして、それら博物館等の存続発展と役割分担を検討したいと思っている。

国立大学にとっても、博物館にとっても、法人化以上に大きな問題がある。それは少子化に伴う諸問題である。大学にとっては入学者数の減少と学力低下が最も憂慮すべき課題であろうし、博物館にとっても来館者数の減少をいかにくい止めるかが大きな課題となっている。これが第四の課題である。記念館はすでに待ちの姿勢から外に打って出る姿勢に転換しつつある。移動博物館、特別展、テーマ展、館外での特別講演会、体験学習など多様な年齢層に対応できる工夫をしている。その際、学芸員達は自分の専門領域のみの仕事をしているだけでは済まず他分野の勉強も相当程度しておかないと業務をこなせない。この点でも大学における教員の研究、教育、大学運営への関わり方の問題と基本的に同じである。

大学附属博物館も大規模大学に設置されてきたが、まだ端緒に就いたところで予算はともかく、少人数の専任教職員でご苦労が多いと思われる。そのような問題は個別の大学で解決しなければならないが、それとは別に、設置理念と充実の方向がその地域の既存博物館等にどのような影響を与えるかが今後の大きな課題になることを指摘しておきたい。上述のような博物館間の役割分担を検討する過程で、大学附属博物館の存在と個性が一つの大きな要素になると考えている。道内国立大学間での課題と同様に、博物館間でも連携強化の具体化が急務となっているのである。

私の現在の仕事の紹介は、結局、北海道開拓記念館という博物館と国立大学の共通課題を混雑させたためにやや不明瞭な文になってしまった。しかし、学術論文ではないのでその点はお許し頂きたい。博物館の状況を少しでも理

解して頂き、一層関心を持って下さる契機になれば望外の幸せである。小樽商科大学の今後の発展と「人文研究」のさらなる充実を心から祈念申し上げます。

(北海道開拓記念館館長、小樽商科大学名誉教授)